

ラットの2週間(90日間亜急性毒性試験の用量設定試験:最小毒性量 1000 ppm)、90日間[12.(1)](最小毒性量 5000 ppm)及び2年間[13.(2)](最小毒性量 8000 ppm)の試験において、長期毒性試験の最小毒性量がより短期の試験の最小毒性量に比して高かった。この理由を検討するため、SDラット(一群雌 12匹)を用いた4週間混餌(原体:0、250、8000及び20000 ppm)投与によるメトキシフェノジドの肝組織中グルタチオン含量測定試験が実施された。さらに、肝薬物代謝酵素誘導能及び甲状腺機能試験が実施された。なお、各群6匹を投与開始2週後に中間と殺し、各種検査に供した。

全試験群で死亡は見られず、また一般状態、体重、摂餌量に変化は見られなかった。

血清中検体濃度及び肝組織中グルタチオン含量の測定では、血中の検体濃度は投与開始2週後より4週後で低い値を示した。しかし、肝組織中グルタチオン含量については、対照群と比較して20000 ppm投与群で、投与2週後には還元型(GSH)及び酸化型(GSSG)グルタチオンがともに増加した。また、投与4週後にはGSHの増加は見られたがGSSGは対照群と同等であった。これらの結果から、メトキシフェノジドを反復投与した場合、肝臓におけるグルタチオン関連酵素系が亢進される可能性が示唆された。

甲状腺に関しては、20000 ppm投与群で投与4週後にT4濃度の低下、投与2及び4週後にTSH濃度の上昇傾向、8000 ppm以上投与群で甲状腺ろ胞上皮細胞肥大が認められた。肝臓に関しては、20000 ppm投与群で肝ミクロソーム画分のUDPGTの増加、門脈周囲性肝細胞肥大及び好酸性化が、8000 ppm以上投与群で肝絶対重量及び比重量の増加、肝腫大、肝ミクロソームタンパク量の増加、CYP3A2の増加及びCYP2B1の減少、門脈周囲性肝細胞肥大が認められた。

以上の結果から、メトキシフェノジドはラットにおいてCYP3A2及びUDPGTを誘導する可能性が示唆された。本試験における無毒性量は、250 ppm(18.6 mg/kg 体重/日)と考えられた。(参照2)

### (3) 肝薬物代謝酵素誘導能試験(マウス)

マウスの2週間(マウス90日間亜急性毒性試験の用量設定試験:無毒性量 1000 ppm)、90日間[12.(2):無毒性量 2500 ppm]及び18ヶ月間[13.(3):無毒性量 7000 ppm]の試験において、長期毒性試験の無毒性量がより短期の試験の無毒性量に比して高かった。この理由を検討するため、ICRマウス(一群雌 12匹)を用いた4週間混餌(原体:0、100、2500及び7000 ppm)投与によるメトキシフェノジドの肝組織中グルタチオン含量測定及び肝薬物代謝酵素誘導能試験が実施された。なお、各群6匹を投与開始2週後に中間と殺し、各種検査に供した。

全試験群で死亡は見られず、また一般状態、体重、摂餌量に変化は見られなかった。肝臓の重量にも検体投与に関連する変化は認められなかった。

肝組織中グルタチオン含量については、対照群と比較して7000 ppm投与群で、投与2週後にGSH及びGSSGがともに増加傾向を示したが、投与4週後にはGSH及びGSSGは対照群と同等であり、検体投与の影響は認められなかった。

7000 ppm投与群では、肝腫大、肝ミクロソーム画分のチトクロームP450含量の増加、門脈周囲性肝細胞好酸性化が認められた。2500 ppm以上投与群では肝ミクロソーム画分のECOD及びPROD活性上昇、CYP3A及びCYP2Bの増加が認められた。2500 ppm

投与群では投与 2 週後に門脈周囲性肝細胞好酸性化が見られたが、投与 4 週後には認められなかった。

以上の結果より、メトキシフェノジドはマウスにおいて酵素誘導剤である可能性が示唆された。本試験における無毒性量は、100 ppm (13.8 mg/kg 体重/日) と考えられた。  
(参照 2)

### Ⅲ. 総合評価

参照に挙げた資料を用いて、農薬「メトキシフェノジド」の食品健康影響評価を実施した。

動物体内運命試験において、メトキシフェノジドは主として胆汁を經由して糞中に排泄された。主要代謝物はB及びFの他、D、H、I、K、Lであった。

植物体内運命試験において、主要代謝物はB、C1、C2、H、F及びBGであったが、いずれも10%TRR未満であった。

メトキシフェノジド、代謝物B及びC1を分析対象化合物とした作物残留試験が実施された。メトキシフェノジドの最高値は、最終散布7日後に収穫した茶(荒茶)の13.9 mg/kgであった。代謝物B及びC1の最高値は稲わらを除くとBでは最終散布7日後に収穫した茶(荒茶)の0.06 mg/kg、C1では最終散布7及び14日後に収穫した茶(荒茶)の0.03 mg/kgであった。また、魚介類における最大推定残留量は0.017 ppmであった。

各種毒性試験結果から、メトキシフェノジド投与による影響は、主に血液、肝臓及び腎臓に認められた。発がん性、繁殖能に対する影響、催奇形性及び遺伝毒性は認められなかった。

各種試験結果から、食品中の暴露評価対象物質をメトキシフェノジド(親化合物のみ)と設定した。

評価に用いた評価書等に記載されている各試験の無毒性量等は表13に示されている。

食品安全委員会は、各試験の無毒性量の最小値がイヌを用いた1年間慢性毒性試験の9.8 mg/kg 体重/日であったので、これを根拠として安全係数100で除した0.098 mg/kg 体重/日を一日摂取許容量(ADI)と設定した。

ADI	0.098 mg/kg 体重/日
(ADI 設定根拠資料)	慢性毒性試験
(動物種)	イヌ
(期間)	1年間
(投与方法)	混餌
(無毒性量)	9.8 mg/kg 体重/日
(安全係数)	100

暴露量については、当評価結果を踏まえて暫定基準値の見直しを行う際に確認することとする。

表 13 各試験における無毒性量等の比較

動物種	試験	投与量 (mg/kg 体重/日)	無毒性量 (mg/kg 体重/日) 1)				
			農薬抄録	JMPR	米国	カナダ	豪州
ラット	90 日間亜急性 毒性試験	0、50、250、1000、 5000、20000 ppm 雄：0、3.4、17.0、69.3、 353、1370 雌：0、3.7、19.1、72.4、 379、1530	雄：69.3 雌：72.4  肝細胞肥大等	雄：69 雌：72  肝細胞肥大等	雄：69 雌：72  肝細胞肥大等	雄：1370 雌：1530  毒性所見なし	雄：69 雌：72  肝細胞肥大等
	90 日間亜急性 神経毒性試験	0、200、2000、20000 ppm 雄：0、13、130、1320 雌：0、16、159、1580	雄：1320 雌：1580  毒性所見なし (神経毒性は認められ ない)	雄：1320 雌：1580  毒性所見なし (神経毒性は認められ ない)	雄：1320 雌：1580  毒性所見なし (神経毒性は認められ ない)	雄：1320 雌：1580  毒性所見なし (神経毒性は認められ ない)	雄：1320 雌：1580  毒性所見なし (神経毒性は認められ ない)
	2 年間慢性毒性/ 発がん性併合 試験	0、200、8000、20000 ppm 雄：0、10.2、411、1050 雌：0、11.9、491、1250	雄：10.2 雌：11.9  RBC 減少等 (発がん性は認められ ない)	雄：10.2 雌：11.9  赤血球関連数値減少等 (発がん性は認められ ない)	雄：10.2 雌：11.9  RBC 減少等 (発がん性は認められ ない)	雄：10.2 雌：11.9  RBC 減少等 (発がん性は認められ ない)	雄：10 雌：12  RBC 減少等 (発がん性は認められ ない)
	2 世代繁殖試験	0、200、2000、20000 ppm P 雄：0、15.4、153、 1550 P 雌：0、17.9、181、 1820 F <sub>1</sub> 雄：0、19.1、193、 1960 F <sub>1</sub> 雌：0、20.4、203、 2040	親動物 P 雄：15.4 P 雌：17.9 F <sub>1</sub> 雄：19.1 F <sub>1</sub> 雌：20.4 児動物 P 雄：1550 P 雌：1820 F <sub>1</sub> 雄：1960 F <sub>1</sub> 雌：2040	親動物 P 雄：153 P 雌：143 F <sub>1</sub> 雄：193 F <sub>1</sub> 雌：143 児動物 143	親動物 P 雄：153 P 雌：181 F <sub>1</sub> 雄：193 F <sub>1</sub> 雌：203 児動物 雄：1552 雌：1821	親動物 P 雄：153 P 雌：181 F <sub>1</sub> 雄：193 F <sub>1</sub> 雌：203 児動物 1821	親動物 雄：15 雌：18 児動物 雄：153 雌：181

動物種	試験	投与量 (mg/kg 体重/日)	無毒性量 (mg/kg 体重/日) <sup>1)</sup>				
			農薬抄録	JMPR	米国	カナダ	豪州
			親動物：体重増加抑制等 児動物：毒性所見なし (繁殖能に対する影響は認められない)	親動物：体重増加抑制等 児動物：膈開口遅延 (繁殖能に対する影響は認められない)	親動物：肝重量の増加等 児動物：毒性所見なし (繁殖能に対する影響は認められない)	親動物：肝重量の増加等 児動物：毒性所見なし (繁殖能に対する影響は認められない)	親動物：体重増加抑制等 児動物：膈開口遅延 (繁殖能に対する影響は認められない)
	発生毒性試験	0, 100, 300, 1000	母動物及び胎児：1000  毒性所見なし (催奇形性は認められない)	母動物及び胎児：1000  毒性所見なし (催奇形性は認められない)	母動物及び胎児：1000  毒性所見なし (催奇形性は認められない)	母動物及び胎児：1000  毒性所見なし (催奇形性は認められない)	母動物及び胎児：1000  毒性所見なし (催奇形性は認められない)
マウス	90日間亜急性毒性試験	0, 70, 700, 2500, 7000 ppm 雄：0, 11.9, 112, 428, 1150 雌：0, 17.4, 165, 589, 1740	雄：428 雌：589  体重増加抑制傾向	雄：428 雌：589  体重増加抑制傾向	雄：428 雌：589  体重増加抑制	雄：1149 雌：1742  毒性所見なし	雄：428 雌：589  体重増加抑制
	18ヶ月間発がん性試験	0, 70, 2800, 7000 ppm 雄：0, 10.0, 405, 1020 雌：0, 12.8, 529, 1350	雄：1020 雌：1350  毒性所見なし (発がん性は認められない)	雄：1020 雌：1350  毒性所見なし (発がん性は認められない)	雄：1020 雌：1350  毒性所見なし (発がん性は認められない)	雄：1020 雌：1350  毒性所見なし (発がん性は認められない)	雄：1020 雌：1350  毒性所見なし (発がん性は認められない)
ウサギ	発生毒性試験	0, 100, 300, 1000	母動物及び胎児：1000  毒性所見なし (催奇形性は認められない)	母動物及び胎児：1000  毒性所見なし (催奇形性は認められない)	母動物及び胎児：1000  毒性所見なし (催奇形性は認められない)	母動物及び胎児：1000  毒性所見なし (催奇形性は認められない)	母動物及び胎児：1000  毒性所見なし (催奇形性は認められない)
イヌ	90日間亜急性毒性試験	0, 15, 50, 500, 5000, 15000 ppm 雄：0, 0.6, 2.0, 21.4, 198, 422	雄：21.4 雌：209  雄：RBCの減少等	雄：198 雌：209  毒性所見なし	雄：198 雌：209  毒性所見なし	雄：198 雌：209  毒性所見なし	雄：198 雌：209  毒性所見なし

動物種	試験	投与量 (mg/kg 体重/日)	無毒性量 (mg/kg 体重/日) <sup>1)</sup>					
			農薬抄録	JMPR	米国	カナダ	豪州	
		雌：0、0.6、1.9、20.4、 209、460	雌：毒性所見なし					
	1年間慢性 毒性試験	0、60、300、3000、 30000 ppm 雄：0、2.2、9.8、106、 1150 雌：0、2.2、12.6、111、 1200	雄：9.8 雌：12.6  RBCの減少等	雄：9.8 雌：12.6  肝肥大等	雄：9.8 雌：12.6  RBC減少等	雄：9.8 雌：12.6  RBC減少等	雄：10 雌：13  RBC減少等	
ADI			NOAEL：9.8 SF：100 ADI：0.098	NOAEL：10及び9.8 SF：100 ADI：0.1	NOAEL：10.2 UF：100 cRfD：0.10	NOAEL：10.2及び9.8 UF：100 ADI：0.10	NOAEL：10 SF：100 ADI：0.1	
ADI 設定根拠資料			イヌ1年間慢性毒性 試験	ラット2年間慢性毒性/ 発がん性併合試験 イヌ1年間慢性毒性 試験	ラット2年間慢性毒性/ 発がん性併合試験	ラット2年間慢性毒性/ 発がん性併合試験 イヌ1年間慢性毒性 試験	ラット2年間慢性毒性/ 発がん性併合試験 イヌ1年間慢性毒性 試験	

／：試験記載なし SF：安全係数 UF：不確実係数 cRfD：慢性参照用量 <sup>1)</sup>：無毒性量欄には、最小毒性量で認められた主な毒性所見等を記した。

<別紙1：代謝物/分解物略称>

記号	化 学 名
B	3,5-ジメチル安息香酸 <i>N tert</i> ブチル- <i>N</i> <sup>2</sup> (3-ヒドロキシ-2-メチルベンゾイル)ヒドラジド
C1	3-ヒドロキシメチル-5-メチル安息香酸・ <i>N tert</i> ブチル- <i>N</i> <sup>2</sup> (3-メトキシ-2-メチルベンゾイル)ヒドラジド
C2	3-[ <i>N tert</i> ブチル- <i>N</i> <sup>2</sup> (3-メトキシ-2-メチルベンゾイル)ヒドラジノカルボニル]-5-メチル安息香酸
D	3,5-ジメチル安息香酸 <i>N tert</i> ブチル- <i>N</i> <sup>2</sup> (3,4*-ジヒドロキシ-2-メチルベンゾイル)ヒドラジド *：第2のヒドロキシ基の位置は未確定
F	3-ヒドロキシメチル-5-メチル安息香酸 <i>N tert</i> ブチル- <i>N</i> <sup>2</sup> (3-ヒドロキシ-2-メチルベンゾイル)ヒドラジド
H	3,5-ビス-ヒドロキシメチル安息香酸 <i>N tert</i> ブチル- <i>N</i> <sup>2</sup> (3-メトキシ-2-メチルベンゾイル)ヒドラジド
I	3-ヒドロキシメチル-5-メチル安息香酸 <i>N tert</i> ブチル- <i>N</i> <sup>2</sup> (3,4*-ジヒドロキシ-2-メチルベンゾイル)ヒドラジド *：第2のヒドロキシ基の位置は未確定
K	3,5-ビス-ヒドロキシメチル安息香酸 <i>N tert</i> ブチル- <i>N</i> <sup>2</sup> (3-ヒドロキシ-2-メチルベンゾイル)ヒドラジド
L	β-D-グルコピラヌロン酸, 3-{{2-(1,1-ジメチルエチル)-2-(3,5-ジメチルベンゾイル)ヒドラジノ}カルボニル}-2-メチルフェニル
Q1	β-D-グルコピラヌロン酸, 3-{{2-(1,1-ジメチルエチル)-2-(3-ヒドロキシメチル-5-メチルベンゾイル)ヒドラジノ}カルボニル}-2-メチルフェニル
BG	(A環フェノールグルコース抱合体)

※：化学名が不明のものは（ ）により記した。

<別紙2：検査値等略称>

略称	名称
ai	有効成分量
BCF	生物濃縮係数
C <sub>max</sub>	最高濃度
CMC	カルボキシメチルセルロース
CYP	チトクロム P450 アイソザイム
ECOD	チトクロム P450 依存性モノオキシゲナーゼ (7-エトキシクマリンデエチラーゼ)
GGT	γ-グルタミルトランスフェラーゼ (=γ-グルタミルトランスペプチダーゼ (γ-GTP) )
GSH	還元型グルタチオン
GSSG	酸化型グルタチオン
Hb	ヘモグロビン量 (血色素量)
Ht	ヘマトクリット値
LC <sub>50</sub>	半数致死濃度
LD <sub>50</sub>	半数致死量
MCH	平均赤血球血色素量
MCV	平均赤血球容積
PEC	環境中予測濃度
PHI	最終使用から収穫までの日数
PLT	血小板数
PROD	ペントキシレゾルフィン O-デペンチラーゼ
RBC	赤血球数
T4	サイロキシシン
TAR	総投与 (処理) 放射能
T.Bil	総ビリルビン
T <sub>max</sub>	最高濃度到達時間
TRR	総残留放射能
TSH	甲状腺刺激ホルモン
UDPGT	ビリルビン抱合酵素 (ウリジン二リン酸グルクロニルトランスフェラーゼ)



<別紙3：作物残留試験成績>

作物名 実施年	試験 圃場 数	使用量 (g ai/ha)	回 数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)					
					親化合物		代謝物 B		代謝物 C1	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
水稲 (玄米) 1997年	2	200 DL	3	14	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02
				20-21	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02
				28	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02
水稲 (玄米) 2000年	2	67.5 SC	3	14	0.02	0.01*	/	/	/	/
				21	0.02	0.01*	/	/	/	/
				28	0.02	0.01*	/	/	/	/
水稲 (玄米) 2001年	2	45 SC	3	14	0.01	0.01*	/	/	/	/
				21	0.01	0.01*	/	/	/	/
水稲 (稲わら) 1997年	2	200 DL	3	14	1.96	1.22	0.17	0.13	0.05	0.04*
				20-21	1.73	1.05	0.20	0.14	<0.04	<0.04
				28	2.22	1.20	0.24	0.19	<0.04	<0.04
水稲 (稲わら) 2000年	2	67.5 SC	3	14	0.67	0.52	/	/	/	/
				21	0.70	0.57	/	/	/	/
				28	0.63	0.47	/	/	/	/
水稲 (稲わら) 2001年	2	45 SC	3	14	2.32	1.95	/	/	/	/
				21	1.87	1.28	/	/	/	/
大豆 (乾燥子実) 2001年	2	67.5 SC	2	7	<0.01	<0.01	/	/	/	/
				14	<0.01	<0.01	/	/	/	/
				21	<0.01	<0.01	/	/	/	/
大豆 (乾燥子実) 2003年	2	45 SC	2	7	<0.01	<0.01	/	/	/	/
				14	<0.01	<0.01	/	/	/	/
				21	<0.01	<0.01	/	/	/	/
てんさい (根部) 2000年	2	75 SC	3	7	<0.01	<0.01	/	/	<0.01	<0.01
				14	<0.01	<0.01	/	/	<0.01	<0.01
				21	<0.01	<0.01	/	/	<0.01	<0.01
はくさい (茎葉) 2002年	2	100~ 119 SC	2	3	0.28	0.14	/	/	/	/
				7	0.20	0.10*	/	/	/	/
				14	0.07	0.03*	/	/	/	/
キャベツ (葉球) 1998年	2	300 SC	2	7	0.22	0.18	/	/	<0.01	<0.01
				14	0.14	0.10	/	/	<0.01	<0.01
				21	<0.01	<0.01	/	/	<0.01	<0.01
レタス (茎葉) 2001年	2	200 SC	2	3	3.60	1.79	/	/	/	/
				7	3.83	1.93	/	/	/	/
				14	2.82	1.24	/	/	/	/
根深ネギ (茎葉) 1997年	2	150 SC	2	14	0.72	0.44	/	/	/	/
				21	0.26	0.16	/	/	/	/
				30	0.06	0.06	/	/	/	/

作物名 実施年	試験 圃場 数	使用量 (g ai/ha)	回 数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)					
					親化合物		代謝物 B		代謝物 C1	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
葉ネギ (茎葉) 1998年	2	150 <sup>SC</sup>	2	14	0.17	0.13	/	/	/	/
				21	0.09	0.05				
				30	0.04	0.02				
トマト (果実) 1999年	2	250 <sup>SC</sup>	2	1	0.41	0.19	/	/	/	/
				3	0.29	0.16				
				7	0.21	0.14				
ピーマン (果実) 2000年	2	300 <sup>SC</sup>	2	1	1.09	0.75	/	/	/	/
				3	0.85	0.49				
				7	0.64	0.33				
なす (果実) 2000年	2	250 <sup>SC</sup>	2	1	0.61	0.44	/	/	/	/
				3	0.27	0.16				
				7	0.10	0.07				
ししとう (果実) 2004年	2	250~ 350 <sup>SC</sup>	2	1	0.80	0.76	/	/	/	/
				3	0.48	0.44				
				7	0.14	0.12				
はすいも (葉柄) 2004年	2	300 <sup>SC</sup>	2	1	<0.1	<0.1	/	/	/	/
				3	<0.1	<0.1				
				7	<0.1	<0.1				
りんご (果実) 1997年	2	600 <sup>SC</sup>	3	21	0.80	0.63	/	/	<0.01	<0.01
				30	0.93	0.70			<0.01	<0.01
				45	0.51	0.44			<0.01	<0.01
おうとう (果実) 2002年	2	200~ 250 <sup>SC</sup>	3	3	0.62	0.42	/	/	/	/
				7	0.43	0.32				
				14	0.27	0.18				
いちご (果実) 2000年	2	100 <sup>SC</sup>	3	1	0.60	0.49	/	/	/	/
				3	0.53	0.42				
				7	0.36	0.28				
茶 (荒茶) 1998年	2	100 <sup>SC</sup>	2	7	13.9	8.64	0.06	0.03*	0.03	0.02*
				14	5.08	3.64	0.05	0.02*	0.03	0.02*
				21	1.95	1.07	<0.02	<0.02	0.02	0.02*
茶 (浸出液) 1998年	2	100 <sup>SC</sup>	2	7	2.57	1.74	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02
				14	0.85	0.53	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02
				21	0.30	0.19	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02

注) DL: 粉剤、SC:フロアブル、

・一部に定量限界未満を含むデータの平均を計算する場合は定量限界を検出したものとして計算し、\*を付した。

・全てのデータが定量限界未満の場合は定量限界の平均に<を付して記載した。

<参照>

- 1 食品、添加物等の規格基準(昭和34年厚生省告示第370号)の一部を改正する件(平成17年11月29日付、平成17年厚生労働省告示第499号)
- 2 農薬抄録メトキシフェノジド(殺虫剤)(平成18年7月7日改訂):ダウ・ケミカル日本株式会社
- 3 JMPR: Pesticide residues in food-2003-Joint FAO/WHO Meeting on Pesticide Residues METHOXYFENOZIDE (2003)
- 4 US EPA: Federal Register / Vol.67, No.183 / Friday, September 20, 2002 / Rules and Regulations(2002)
- 5 US EPA: Methoxyfenozide. Human Health Risk Assessment for Proposed Use on Soybeans. (2006)
- 6 US EPA: METHOXYFENOZIDE;-Report of the Hazard Identification Assessment Review Committee. (1999)
- 7 Health Canada: Regulatory Note, Methoxyfenozide. REG2004-08 (2004)
- 8 Australia NRA: Evaluation of the new active METHOXYFENOZIDE (2002)
- 9 食品健康影響評価について: 食品安全委員会第177回会合資料1-1 (URL: <http://www.fsc.go.jp/iinkai/i-dai177/dai177kai-siryou1-1.pdf>)
- 10 暫定基準を設定した農薬等に係る食品安全基本法第24条第2項の規定に基づく食品健康影響評価について: 食品安全委員会第177回会合資料1-3 (URL: <http://www.fsc.go.jp/iinkai/i-dai177/dai177kai-siryou1-3.pdf>)
- 11 食品安全委員会農薬専門調査会確認評価第二部会第5回会合 (URL: [http://www.fsc.go.jp/senmon/nouyaku/kakunin2\\_dai5/index.html](http://www.fsc.go.jp/senmon/nouyaku/kakunin2_dai5/index.html))
- 12 食品健康影響評価について: 食品安全委員会第196回会合資料1-1 (URL: <http://www.fsc.go.jp/iinkai/i-dai196/dai196kai-siryou1-1.pdf>)
- 13 メトキシフェノジドの魚介類における最大推定残留値に係る資料
- 14 「ノバルロン」及び「メトキシフェノジド」の食品安全基本法第24条第1項に基づく食品健康影響評価について: 食品安全委員会第196回会合資料1-2 (URL: <http://www.fsc.go.jp/iinkai/i-dai196/dai196kai-siryou1-2.pdf>)
- 15 食品安全委員会農薬専門調査会幹事会第25回会合 (URL: [http://www.fsc.go.jp/senmon/nouyaku/kanjikai\\_dai25/index.html](http://www.fsc.go.jp/senmon/nouyaku/kanjikai_dai25/index.html))